

# Every day create our history

「長坂駅開駅100周年」  
胸に希望の汽笛を鳴らそう!



撮影：植松波雄



撮影：植松波雄

今からちょうど100年前、町の発展を願った住民が「長坂にも鉄道の駅を！」と力強く押し進めた開駅。歴史をひもとけば、元気よく煙をはいて痛快に走る蒸気機関車ながら、みなぎる「人のエネルギー」が伝わってくる。「ただ新しいものを導入して対応するのではなく『自分たちで豊かな町を創っていくんだ!』という気概。それは今もこの地に息づいています」。そう語る笹本倫さんに、北杜市郷土資料館で解説をしていただいた。

(文・佐々木知勢子)



▲長坂駅前商店街の賑わい  
撮影：植松波雄

「先見の明がありますよね」。笹本さんは、古いモノクロ写真の中で、開駅を祝した石碑の前に立つ彼らにこやかに語る。物資の輸送や人の乗降が可能になると、蚕糸業の隆盛と共に長坂駅前商店街は活気づいたそう。二つの大きな繭糸市場が開業して栄えた。そこでは取引だけでなく、休業中にはサーカスや相撲、映画なども催され、今の市民文化ホールのような存在だったのだと笹本さんが教えてくれる。ただ、当時の道路は整備されたとはいえ、路面は土で、雨になればぬかるみ、通る馬車が壊れて大変だったそう。鍛冶屋(修理屋)が馬車を追いかけたという話が伝えられており、そこからは賑わいの様子と人々の苦勞が伺い知れる。そして、昭和5年、アメリカに端

「先見の明がありますよね」。笹本さんは、古いモノクロ写真の中で、開駅を祝した石碑の前に立つ彼らにこやかに語る。物資の輸送や人の乗降が可能になると、蚕糸業の隆盛と共に長坂駅前商店街は活気づいたそう。二つの大きな繭糸市場が開業して栄えた。そこでは取引だけでなく、休業中にはサーカスや相撲、映画なども催され、今の市民文化ホールのような存在だったのだと笹本さんが教えてくれる。ただ、当時の道路は整備されたとはいえ、路面は土で、雨になればぬかるみ、通る馬車が壊れて大変だったそう。鍛冶屋(修理屋)が馬車を追いかけたという話が伝えられており、そこからは賑わいの様子と人々の苦勞が伺い知れる。そして、昭和5年、アメリカに端

「辛い時こそ愉快に」。そんな不屈の魂は、地元の人たちに脈々と受け継がれていると笹本さんは実感するそう。100年前の昔も今も、町の歴史は営みを続ける人々たちによって、毎日創られている。

歴史は日々創られていく  
線路は続くよどこまでも

「今では都会の人たちの憧れをかきたてる地域として、北杜市は全国でも1、2位を争う人気エリアになっています。開駅当時より甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山の登山口駅として多くの人に利用され、山の美観が評判となった日野春駅や、昭和初期には小海線の開通に不況打開の望みをか

笹本倫さん (26歳)  
北杜市郷土資料館の学芸員。今年の4月から勤務し、7月21日から12月24日まで開催の企画展「北杜に汽笛が響いた日～やってきた鉄道と近代化～」の実施担当として携わる。「地元の方を訪ね、直接いろいろなお話を伺って、とても勉強になりました」と笑顔で。



## 七里岩の台地上を走る 明るい夢の蒸気機関車

「長坂駅開駅100周年」に合わせて、企画展示が開かれている北杜市郷土資料館。学芸員の笹本倫さんは、「かつて甲府から諏訪にかけて、峡北地域で中央線の路線調査が行なわれた際には、釜無川沿線ルートも候補に上がっていましたが、洪水などの危険性や橋を架ける費用を考慮し、七里岩台地上ルートが採用されました」と説明してくれる。展示室にはジオラマが飾られており、ひと目でその様子を鳥瞰できる。

明治36年には韭崎駅、翌年の37年には日野春駅と小淵沢駅の両駅も出来上がって開通し、当時の「なないろエリア」に蒸気機関車の汽笛が威勢良く鳴り響くようになった。大正4年、信号所を作る計画が浮上した際、「長坂にもぜひ駅を！」との気



▲昭和8年当時の長坂駅

運が地元で高まり、大正5年には上条地区の有志が請願委員を結成するに至ったという。

## 長坂を八ヶ岳南麓の 一大「集散地」に!

請願委員のメンバーは、単純に駅舎が欲しかったわけではなく、当時未開の地であった長坂を開拓し「自分たちの町を豊かにしたい」というのが真の願いだったと語る笹本さん。八ヶ岳南麓の生産地から産物を集めて消費地に送り出す拠点。すなわち「集散地」を、日野春と小淵沢のちょうど真ん中に位置する長坂に作ろう! そんな大志をみんなが共有していたのだ。

「一部資金を負担、駅の敷地を全て用意すること」との国が出した条件にのびるべく、寄付金を募る行脚を続けながら、自ら土地を開拓し、都市計画を進め、移住者の募集もかけた地元民。幸い、当時取引が盛んだった諏訪の製糸業者の協力も得られて、大正7年に、めでたく「長坂駅」は開駅の日を迎えることができた。



▲信号所



▲昭和30年頃。当時長坂駅はスイッチバックの駅だった。汽車は一度坂をのぼりつめてから後退してホームに入っていく。通勤客はホームではなく、その坂の上で汽車を待ち構えていた。



撮影：植松波雄



▲当日の祝賀弁当

けた小淵沢駅の新たな取り組みで、観光業の基盤が作られたことも功を奏しましたね」と笹本さん。長坂駅開駅100周年に当たる節目の今年、町づくりという近代化に取り組んだ先人たちの思いを振り返って、これから先も、私たちが希望の歴史を刻んでいこう。

**長坂駅開駅100周年**  
2018年12月23日  
開駅記念式典  
狩人コンサート

長坂駅開駅100周年記念事業実行委員会  
北杜市郷土資料館 学芸員 笹本倫さん 氏  
北杜市郷土資料館 学芸員 笹本倫さん 氏

**長坂駅開駅 100周年 記念式典**  
長坂コミュニティ・ステーション  
**2018年12月23日(日)**

12:30 記念式典 (予定)  
14:00 狩人コンサート 第1部  
17:00 狩人コンサート 第2部